

倫理性を支えるベクトル

—《沖縄の記憶／日本の歴史》第一回研究会 所感—

師玉 真理

《沖縄の記憶／日本の歴史》第一回研究会（2000年10月21日）が上村忠男、村井紀、両氏の基調報告を中心におこなわれた。上村忠男氏の報告「谷川健一編『叢書・わが沖縄』（木耳社、1970～72）の提議したもの」は、吉本隆明＝島尾敏雄＝谷川健一らの思想と論理の批判的受容とその可能性を問うものであった。これに対し、村井紀氏の報告「『日本民俗学』ファシズム・植民地主義・南島論」のほうは、柳田国男・折口信夫に溯ってそのイデオロギー性を問うものであり、さらにはこのワークショップじたいに警鐘をならす批判的役割を担っていたように思われる。本稿では私自身の発言もまじえて今回のワークショップを振り返ってみたい。

谷川健一が沖縄を視点に「本土の歴史」を〈相対化〉しつつも、その世界観を「文化本質主義的に実体化してとらえてしまっていること」を上村氏は批判する。しかしその懸念にもかかわらず可能性を問うるのは、むしろ吉本隆明の「異族の論理」（『情況』、河出書房新社、1970）によっている。そして、この「異族の論理」の発想の根底には、島尾敏雄の〈ヤポネシア〉な

る文学者の直感がある。上村氏はここで〈ヤポネシア〉がメタレベルでの形式的カテゴリーとして理解されるべきで、経験的実体として捉えてはならないことを指摘している。

ワークショップ中の私の発言もここに端を発する。島尾が〈ヤポネシア〉を発想する際その拠点にあったのは、沖縄からも本土からもずれ、かといって郷愁からも疎外された奄美の位相である。日本を群島とみなし、「本土」を〈相対化〉する〈ヤポネシア〉の概念イメージは、この位相の反転としてある。私がワークショップ中指摘したのは、概念装置としてのこの〈ヤポネシア〉の意味と、そこに賭されているふたつの倫理性についてである。以下、そのときの発言に則して述べてみる。

ここでいう島尾にとっての奄美の位相は、思考の拠点としてどこにも帰属できない場所であり、思惟者（論者といってもいいし言及する者といってもよい）に内在するモメントとしてある。それは一階のマージナルとして実体化できないような場所ではなく、マージナル（限界）のマージナル（限界）といった二階の微分係数—

ベクトル—としてとりだされねばならないものとしてある。これは、吉本が「異族の論理」において島尾から継承しているもつともみえにくい部分であるとともにもつとも肝要な部分である。ここに思惟者（論者、言及者）が自身を問い返す、あるいはみずからがひきうけるかたちでの倫理性の拠点の問題がまずひとつある（これはG.C.スピヴァクが『サバルタンは語ることができるか』（上村忠男訳、みすず書房、1999）において、知識人の「代理＝表象」の問題として理論に内在化させたベクトルとも一段ずれて重なりと考えられる）。

また「異族の論理」の背後には、カール・マルクスの「ユダヤ人問題のために」が色濃く投影されているということがある。そこには国家、市民社会、政治、あるいは政治的解放と人間的解放といった抽象レベルの解体作業があつて、これにより「異族の論理」が天皇制批判たる理論的な根拠をなしている。だがここで重要なことは、「異族の論理」が「ユダヤ人問題のために」からさらに「アジア的生産様式」の議論を潜在させていることである。吉本の「アジア的生産様式」はきわどいものだが（やがて「プレ・アジア的」から「アフリカ的」にまで拡張されてしまう）、それが機序論的に再構成された時間軸でもって無限遠点として設定され、リニアな歴史的時間の外部に（しかも事実性を志向しつつ）見出される点で、スピヴァクの「アジア的生産様式」（G.C.Spivak, *The Critique of*

Postcolonial Reason, Harvard University Press, 1999）の再評価などと結びつけて考えうる契機をもっている。この位相が企図するのは、一方で「文化本質主義的に実体化される」議論（あるいはヒューマニズムや正義に訴える議論）を、他方でコスモポリタニズムや普遍概念のレベルで解決をみいだそうとする思考とともに解体し、その上で新たな倫理性を呈示しようとする位相をもつことである。こうした抽象レベルの分離と解体のうえに倫理性を呈示する戦略を、私はスピノザーエチカー的なものとして捉えているが、それは理論そのものが語りのうえで孕む表象のポリティクスとしてある（これは吉本の「南島論」から「柳田論」にかけて展開される、海上交通の捉えかえしによる地政空間の解体・再編にも連なる。吉本にあつては、この解体性が、「映像論」におけるランドサットからの視線のようなかたちで理論的アレゴリー＝「形式」として拡張され、ひいては『ハイ・イメージ論Ⅱ』（福武書店、1990）のスムースマルクス論（「拡張論」）、スピノザーライブニッツ論（「幾何論」「自然論」）につながっていると考えられる）。

私見では、上村氏が沖縄（南島）に関わる問題に触れてその議論の可能性を問うた位相は、このふたつの倫理性にかかわる。

このことは、まず、今回のワークショップで上村氏が言及した橋川文三の「西郷隆盛と南の島々——島尾敏雄氏との対談」（『西郷隆盛紀行』、朝日新聞社、1985）にみることができる。

この橋川—島尾対談はそのような倫理性の側面が強く感じられるものであり、橋川はここで、島流しの際に奄美の二重の植民地状況を看取した西郷というテーマに着目し、島尾の〈マージナルのマージナル〉の反転としての〈ヤポネシア〉の位相を正確に捉えている。

そしてここでもうひとつつかかわってくるのは、上村氏が提唱している「ヘテロトピアの思考」

『ヘテロトピアの思考』、未来社、1996)の「反場所」に関わる議論である。その接続の可能性については上村氏じしん示唆していたが、この「反場所」において論者自身の位置が問われるという意味合いも含め、〈マージナルのマージナル〉としての島尾＝吉本の位相と共鳴関係にあると考えられる。また、これにくわえ「反場所」が「ヴィトゲンシュタインを読んだフレーザー」(上村忠男『歴史家と母たち』、未来社、1994)における形式性の議論と潜在的にリンクしていることにも注目すべきである。そこでは静態的な構造に還元されない認識—存在論的な形式性が追究されている。私が指摘したいのは、こうした議論が表象の遂行性としてのポリティクスを内在化している点である。メタの形式性が孕むベクトルが「文化的本質主義」とも、構造主義のような普遍理論的思考とも拮抗的に機能する。すなわちそれは先のふたつの倫理性と不可分なかたちで存するのであり、氏の「メタレベルでの形式的カテゴリーとして」の〈ヤポネシア〉という指摘が意味をもってくるのもこ

の位相においてなのである。

さて、そのような意味での可能性の問題を問うとき触れなければならないのは、今回のワークショップに参加されていた藤井貞和氏の「物語論」に向かう姿勢についてである。藤井氏の「物語論」は、物語の古層(フルコト、モノカタリ)を志向しつきつめていくベクトルと、他方で昨今のテキスト—記号論のような形式性をふまえようとするベクトルが独特な拮抗関係と緊張感をもっている。私はこの論述の仕方それ自体がひとつ大きな意味をもってくると考えている。たとえば『物語の起源—フルコト論』(筑摩書房、1997)の序文での氏の思想表明(状況に対してあえて物語論の考究を選択するんだという姿勢。「われわれの「物語論」の真価が試されている」)は、まさに表象の(スピノザ的)ポリティクスにかかわる問題を提示していると考えられる。

ただし今回のワークショップのなかで、藤井氏自身は上村氏のメタレベルへの志向性に異議を唱えていた。しかし、上述のような視点にたつとき、両氏の距離はさほど遠くないようにみうけられる。

そして最初に述べたように、このふたりを同じ土俵にのせ、「南島イデオログ」として機能してしまう危惧を表明したのが村井氏であった。ここで村井氏の批判の論点は、「南島論」の可能性を問う姿勢が植民地主義の歴史的事実を看過して、「文化本質主義的」に「南島」(あるいは

柳田や折口)を顕揚してしまうことへの懸念にある。だが、上村氏の提題が以上のようなふたつの倫理性にかかわるものであることを考えるとき、村井氏の批判が適切だとは思えない。

また、私は村井氏に対し、オリエンタリズム批判の構図の反復である点を指摘し、それが特殊地域を変数として置き換えるだけのパターンリズムに堕してしまい、折口や柳田といった個々の思考のシンギュラリティが有する可能性を見落としてしまう危惧を述べた。しかし実のところ私のこの批判は、村井氏の「南島イデオロギー」批判に対して的を射たものとはいえない。それはひとつに、沖縄という特定の地域を対象とした際に、村井氏のいう「沖縄ナショナリズム」のような文化本質主義を生じさせてしまう状況がたしかにあって、その有意性が疑えないということがある。だが、このことよりも重要なことは、ワークショップ中、藤井貞和氏も指摘した、偏執的なまでの村井氏の「南島イデオロギー」批判への意志である。実はこの〈意志〉が村井氏の批判をたんなるオリエンタリズム批判の構図の反復ではないものになっているからだ。村井氏のもつこの〈意志〉のかたちを、批判あるいは批評のもつ意味として対自化していく作業はわれわれがひきうけねばならぬものだと考えるが、ここで思い浮かべるのはポール・ド・マンのつぎの台詞である。「何かを脱構築するためには、まずそれを信じなければいけないということを、彼らは理解していない

んだ」(柄谷行人とフレドリック・ジェイムソンとの対談——「政治と批評」:『ダイアログIV』、第三文明社、1991——)における「ド・マン事件—知識人と政治」および「脱構築と決定不能性」の節を参照)。村井氏の批判もまた、その思考のひきうけ方において先に指摘した倫理性の問題にかかわっているものであり、このワークショップの可能性もそのずれと共鳴にあることを強く喚起させられた。

(しだま しんり・東京外国語大学大学院博士後期課程)